話題

版木に託された護国の願い

―世界文化遺産・海印寺大蔵経板殿―

斎木涼子（当館学芸部研究員）

昨年十二月、学術交流により韓国・慶州とその周辺の文化財を見学する機会を得た。是非とも訪れたいと願っていた場所の一つに、世界文化遺産に登録された高麗版大蔵経板殿を有する、海印寺があった。大蔵経とは、経・律・論を中心に仏教典籍を総集したものという意味で、日本では一切経という名称も用いられる。ここで保管される版木の数は八万枚を超えることから、「八万大蔵経」とも呼ばれる。

写真1　大蔵経板殿　入口

この大蔵経は、仏力による蒙古撃退を願った高麗国王の高宗によって雕造されたもので、一二三六年に事業が始まり一二五一年に完成した。大蔵経（一切経）の印刷と言えば、北宋の蜀版一切経（開宝蔵）に始まる宋版一切経が有名だが、周辺国でも蜀版を底本（基準となる本）に大蔵経の雕造が行われた。その一つが、十二世紀に雕造された高麗版大蔵経（初雕本）だった。高麗は仏教を非常に篤く信仰したことで知られ、多大な労力を要する大蔵経の雕造もその一例といえる。この初雕大蔵経は、高麗を北から脅かしていた契丹を追却するという祈りが込められていた。

ところがこの初雕版は、一二三一年の蒙古の攻撃により失われてしまう。その蒙古撃退を願い再び雕造が命じられたのが、「八万大蔵経」（再雕版）だった。当時、蒙古の侵攻により高麗の都は江華島へと遷されていた。完成した版木は江華島大蔵経板堂に集められ、高宗は百官を率い慶成会を行ったという。

やがて一三九八年、版木は漢城支天寺に移され、翌年海印寺へと運ばれている。その理由は定かではないが、より安全な内陸部へ安置しようとしたのではないかと考えられている。それ以来、六百年以上にわたり、この海印寺で八万枚の版木が保管されてきたのである。

海印寺は慶尚南道陜郡の伽耶山にある。本堂にあたる大寂光殿を更に奥に進み、一段高くなった場所に大蔵経が保管される蔵経板殿があった（写真1）。建物は地面の上に直接建てられ、そこに設置された棚に版木がむき出しのまま安置されている。版木の材は、三年間海水に浸したものを陰干して用いたとされる。また土面に塩や灰、粘土を用いて湿度をコントロールするなど、建築技術にも様々な工夫がなされているため、保存状態は非常に良好だという。

我々は建物の格子越し、金網越しに、黒々とした版木が整然と並ぶ様を見る事が出来る。隙間無く並べられた八万千三百四十枚の版木は、圧巻と言うほかない。二度の大蔵経に護国を賭した高麗の信仰の篤さ実感されるのはもちろん、はるか北の江華島からこの山上まで膨大な版木を運んできた事に、もはや執念のようなものさえ感じる。高麗に続く李朝朝鮮は、徐々に仏教を弾圧することになったが、その治世下でも大蔵経版木は大切に保持された。

同行してくれた韓国の方に、この版木で印刷された経典が日本にも現存することを伝えると、とても驚いていた。日本に運ばれた再雕版大蔵経は、現在では大谷大学や増上寺（東京）などに所蔵されている。なお、現在の仏教研究において標準的大蔵経として利用される「大正新脩大蔵経」は、この増上寺の再雕版大蔵経を底本にしている。

当時、多くの日本人僧がこの大蔵経を望んだであろうが、特に熱心に求めたのは室町幕府だった。何度も使節の僧侶を派遣し、ついには版木まで欲してきたという。当然ながらこれは叶わなかった。高麗王朝、室町幕府も姿を消した後も、長い歴史の中で大蔵経版木が維持されてきた事を考えると、仏典を求め、伝えようとする人々の想いを感じずにはいられなかった。

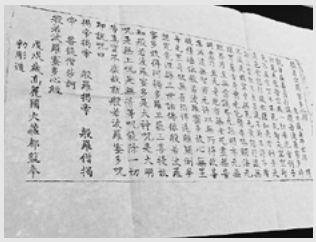

写真2　再雕高麗版大蔵経　複製品